

# 戦時中の早稲田の中国人留学生「馮民澤」氏との出会い

伊藤三平

私のご存じのように変わり者で、結婚したのも昭和 60(1985)年 36 歳時と、当時としては非常に晩婚である。結婚と同時に会社を辞めて独立もしている。「男で結婚退社はオレがはじめてだ」は当時の私の冗談だ。

## 1. 新婚旅行で出会った中国人の早稲田の先輩

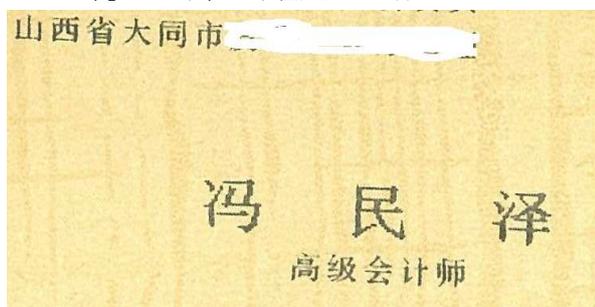
新婚旅行は「北京・大同」である。当時の中国は、人民服を着た人々と自転車の大洪水だ。万里の長城のトイレは屋外で土に溝が掘ってあり、そこに板が渡してあり、その上でのいうものであった。

北京から夜汽車で雲崗の石窟がある大同に向かう。当初のツアーは 4 組 8 人程度だったと思うが、他の 3 組は北京からリゾート地の北戴河に向かうツアーであり、大同へは私と妻だけであった。だから以降の旅行は我々夫婦に通訳兼添乗員の女性、それに運転手という大名旅行であった。

夜汽車はコンパートメントのタイプであった。くつろいでいると、流暢な日本語で、人民服を着た中国の老人から話しかけられた。実に品の良い顔をされていた。驚いたが日本語であり、色々と話をした。その過程で「どこで日本語を覚えられたのですか」とでも聞いたのだと思う。その老人が「自分は早稲田大学に留学していた」とおっしゃるではないか。驚いて「私も早稲田の卒業生です」と述べた。

この時、名刺をいただいた。お名前は「馮民澤」氏（澤は中国語の簡体字になっていたが、早稲田の図書館の方が教えてくれる）で、日本読みでは馮<sup>ひょう</sup>であるが、中国語だとフェン・ミンツァと名乗られた。「山西省大同市□□□□委員」の肩書きがあり、以下、もう一つ会社の肩書きがあり、「高級会計師」とあった。

その時は、大同に着いてから別れる。



## 2. その後の交流

その後、馮さんの大同市の住所に私の方から手紙を差し上げたのだと思う。馮さんが日本語ができることに甘えて、日本語の手紙である。ちなみに私は第 2 外国語で中国語を取っていたが、手紙を書けるほど覚えてはいなかった。何しろ、在学中の早稲田は入試時点で東大入試が学生運動で無い時代で、政治経済学部在学中もろくな授業がおこなわれていなかった大学生活であった（今、作家活動をしている当時の学友とは「ひどい大学生活でしたね」と話し合っている）。だから中国語が身につかなかったわけではなく、当方の不勉強であったが。

文通の中で、馮さんが来日されることを知り、来日される度（2～3度）に、泊まられているホテルでお会いした。中国の開国開放の時代となり、山西省や大同市も日本視察団を送り、その時の通訳として重用されたのだと思う。来日された時は、先輩であり、あまり失礼にならないようにと考えながら電卓や携帯ラジオなどの土産を持参した。

翌年、私の娘が誕生した時は馮さんから虎の絵が彫られた金属のメダルを贈られた。娘が寅年生まれだからである。

そのうちに、当方が手紙を出しても御返事が来なくなる。恐らくはお亡くなりになったのだと思う。

来日された時に、馮さんの現在の生活や、これまでの人生などの立ち上ったお話は伺っていない。中国人にとっては私も侵略者の日本人の一人という引け目も感じたのだと思う。

日中戦争では留学して学んだ国の日本が敵国になったのである。せつかく習得された日本語は敵の言語になったわけである。

そして戦後は、国民党と共産党との内乱。毛沢東と蒋介石の外に汪兆銘の政権も加わったの内乱である。馮さんは戦後も活躍されるわけだから共産党だったのだろう。しかし、共産革命は日本に留学できるほどの資産家の馮家を直撃したと思う。

次は、知識人が目の敵にされた文化大革命（1966～1976）である。文化大革命時の犠牲者は数百万人から2000万人という数値もある。この期間、どのように過ごされたのだろうか。

### 3. 馮氏の早稲田時代の探索

今年（2023）に早稲田を卒業して50年のホームカミングディの案内が来る。山越君が早稲田から最後の案内だから行くかとの話があり、出向くことにする。衣笠君とも一緒に昼を食べて談笑した。

この時に、急に馮さんのことを思い出した。馮さんが早稲田の卒業生とは聞いたが、いつ、どの学部を卒業されたのかは知らずにいたのである。

そこで早稲田大学中央図書館に出向く。昔は安倍球場があった場所に存在する。私が『江戸の日本刀』を上梓した時に、早稲田大学図書館に寄贈しようとしてきたのがはじめてである。この時は、すでに「貴著は蔵書しております」と言われ、感激したものである。

出向くと、この日には詳しい図書館司書の方がおらず、いずれにしても個人情報に該当するから、すぐにお答えできるかはわかりません。インターネット上の早稲田大学中央図書館のサイトに質問を受け付ける案内があるから、そこから問い合わせさせていただく方がいいと助言を受ける。

翌日、サイトから問い合わせをする。お名前の最後の字が簡体字であり、私も中国語の辞書は処分しているから読めない由も伝える。

すると、やはり個人情報だから、直接はお伝えできないが、国会図書館に早稲田の昭和33

年の校友会名簿（この年までの全卒業生が掲載）が電子化されて存在する。そこに馮姓の何人かが掲載されている頁がある。そしてお名前の下の略体字は日本語では「澤」ではないかと丁寧な御返事をいただく。私には個人情報保護の関係で伝えられないが、回答の内容から、当該卒業生を突き止められていると感じた。

後日、国会図書館に、執筆している刀装具に関する調査も兼ねて出向く。当該電子書籍を検索するが、その資料であれば「科学技術・経済情報室」という部屋で聞いてくださいと言われ、そこに出向く。

そして、そのカウンターにいる司書の女性に資料名を伝え、当該頁を出していただく。そしたら<ヒ>の部の「住所不詳者」の欄に「馮民澤 19 専政」とあるのを発見した。喜んで該当ページを印刷するように手配した。

印刷したのを見ると、字が小さい。そして「19 専政」の意味もわからない。お名前を見つけて、喜んで慌てた為に、略記号の意味も調べなかった為である。そこで、また先のカウンターに出向き、当該司書の女性にお願いする。調べていただいている過程で、その司書の女性に、どうしてこの方のことを調べているのかとの経緯を話すと、その女性も「私も早稲田です」と言うのではないか。そこで「学部は？」と聞くと「政治経済の経済」と言うのではないか。そうすると先輩風を吹かすのが昭和の人間で、言葉使いも変わったようで自分でも嫌になるが、先輩の依頼であり、丁寧に調べていただいた。

すると専門部の政治経済を昭和 19 年に卒業したと言う意味であることがわかる。卒業時の馮さんの正確な年齢はわからないが、この時 22 歳と仮定すると、私がお目にかかった 1985 年は 63 歳くらいだったと考えられる。

#### 4. 戦時中の早稲田

昭和 19 年卒業とは、日本が降伏する 1 年前であり、昭和 18 年には、あの名高い学徒出陣が行われた時期ではないか。

そこで、「早稲田大学 100 年史」「早稲田大学 略年表」のサイトや、『留学生の早稲田』（李成市、劉傑 編著）などで簡単に当時のことを調べた。

すると次のように学業修学期間の短縮が行われ、繰り上げ卒業が行われていたことがわかる。

- 昭和 16 年 12 月に学部・専門部・高等師範部・早稲田専門学校で最初の繰り上げ卒業式（修業年限 3 ヶ月短縮）が挙行される。
- 昭和 17 年 9 月には学部・専門部・高等師範部・早稲田専門学校で、2 回目の繰り上げ卒業式（修業年限 6 ヶ月短縮）挙行される。
- 昭和 18 年 9 月に学部・専門部・高等師範部・早稲田専門学校、3 回目の繰り上げ卒業式（修業年限 6 ヶ月短縮）挙行。
- 昭和 19 年 学部・専門部・高等師範部・早稲田専門学校、4 回目の繰り上げ卒業式挙行。
- 昭和 19 年 9 月 前年の学徒出陣で応召中の最高学年在学学生（戦死者を含む）に卒業証書

授与。

学生を軍へ徴兵する動きは次の通りである。

- ★昭和 18 年 9 月 内閣が、学生に対する徴兵延期の特典を停止する「在学徴集延期臨時特例」決定
- ★昭和 18 年 10 月 「在学徴集延期臨時特例」が公布され、文部次官、「在学徴集延期停止ニ関スル件」を通牒して、徴集延期中の学生・生徒は全員 10 月 25 日から 11 月 5 日までの間に各自の本籍地で徴兵検査を受けるよう指示。
- ★昭和 18 年 10 月 早稲田独自の出陣学徒壮行会。
- ★昭和 18 年 10 月 文部省学校報国団主催の出陣学徒壮行会、明治神宮外苑競技場で開催。
- ★昭和 18 年 12 月 文科系学生・生徒約 6,000 人、一斉に入営。

外国人留学生（当時、朝鮮、台湾は日本領であり、外国人ではないが）に対しては以下のような通達が出ている。

- 昭和 18 年 12 月 「朝鮮人、台湾人特別志願兵制度ニヨリ志願セザリシ学生生徒ノ取扱ニ関スル件」を通牒し、陸軍特別志願兵に志願しない外地出身学生・生徒は自発的に休学または退学させること、従わない場合は休学措置を採ることを指示。
- 昭和 19 年 1 月 陸軍特別志願兵として入営する外地出身学生・生徒の出陣壮行会、大隈講堂で挙る。
- 昭和 19 年 12 月 留学生をまとめて教育する臨時留日学生部、開設式挙る。
- 昭和 19 年 12 月 内閣は「留日学生教育非常措置要綱」決定し、翌年 3 月 1 日付で留学生を地方の大学等に分散・集合させたので、学苑における留学生教育は中断。

一方、留学生の方でも、日中間で衝突が起きると「留学生総帰国決議」が何度か決議されていたようだ。しかし、中国に帰国しても、排日取締なども行われていて、日本に学んでいた留学生にとっては幻滅するような事態も生じていて、中国人留学生は悩んだと言われている。

なお、中国人の留学生が多くいたからと言って、早稲田の学問環境が優れていたわけではない。譚覚真（1909～2001）氏は 1934 年政治経済学部卒で、卒業後は外交官、実業家の道に進んだ方だが、氏は次のように書いている。

「日本の大学教育はだいたい欧米流である。外国語を主とし、教授は黒板一杯に洋書の参考書を紹介する。日本に留学してまでこんなに洋書を読まなければならぬかと思うと情けなかった。日本で学ぶ外国の学問はどうしてもイミテーションだ。けっきょく、日本留学生は本場で習得した欧米留学生に及ばないわけである。大学の講義は主として筆記だが、留学生にはだいたい書き取れない。教授先生は留学生に書き取れるような心配などしてくれない。幸いなるかな抜け目のない学校付近の本屋さんが、講義のプリントを売ってくれるから、それで試験に間に合う。おかげで、日本の麻雀学生と一緒に卒業できる。楽なものである。けっきょく、中国人の日本留学の目的は、「安い学費で近い日本で欧米の教育を受ける」ということになる。」（『留学生の早稲田』李成市、劉傑 編著より）